

# マキューアン作『贖罪』（映画『つぐない』）を読む

## 1. 文学少女プライオニーの罪

文学少女の傲慢【ごうまん】● 贖罪 [しょくざい] とは「罪滅ぼし」のことだ。現代イギリスの作家イアン・マキューアン (1948-) が 2001 年に発表した小説『贖罪』、およびその小説を映画化した 2007 年のイギリス映画『つぐない』において、罪を犯すのは 13 歳の文学少女プライオニー・タリスである。従姉 [いとこ] のローラが男にレイプ

見てきたような嘘を言う。

されているのを目撃した彼女は、(1. ) をきちんと見ていないにもかかわらず、姉セシーリアの恋人ロビーが犯人だと証言してしまう。そのためロビーは無実の罪に苦しみ、プライオニー自身も罪の意識を一生背負うことになる。

現代の視点から、古典に学ぶ● 『贖罪』は 21 世紀の小説だが、主な事件が起こるのは、19 世紀初頭の作家ジェーン・オースティン (1775-1817) が描いたような地主階級の伝統的な価値観がまだ残っていた 1935 年のイングランドであり、

奇妙なひとひねり。

舞台になっているのはオースティンの小説『高慢と偏見』(1813) の登場人物が住んでいそうな田舎の (2. ) である。主人公の〈高慢〉と〈偏見〉が

生み出す愚かな (3. ) が混乱を生み出すという物語の展開も、オー

ステインの作品を思わせる。小説『贖罪』は、オースティンから E. M. フォースター (1879-1970) の作品に至る、上層中流階級のお嬢様の恋を描いた古典的なイギリス小説の雰囲気を意識的に取り入れて書かれているのだ。ただしさすがに現代の小説だけあって、古典的な小説にはない奇妙なひとひねりがある。それが何なのかは、またのちほど。

## 2. すれ違う恋人たち (小説の第一部前半)

完璧主義者プライオニー● 小説の第一部は、1935 年のある夏の日に起きた事件を物語る。主人公プライオニー・タリス (13 歳) は裕福な高級官僚タリス氏の次女で、イングランド南部の大邸宅で暮らしている。何事もきっちり (4. )

きちょうめんなプライオニー。

されていないと気が済まないきちょうめんなプライオニーは、物語を作るのが大好きな文学少女でもある。今日はロンドンで銀行員を

ずる賢いローラ。

している兄のリーオンが久しぶりに屋敷に返ってくるので、プライオニーは兄を歓迎するために芝居の台本を書き上げ、

たまたま屋敷に滞在している従姉弟 [いとこ] たちと一緒に上演しようとする。ところが従姉のローラ (15 歳) やその弟の双子たち (9 歳) は思うように動いてくれない。双子は自分たちの家に帰りたくて仕方がないし、ずる賢いローラは、プライオニーが演じるはずだった (5. ) と結ばれるヒロイン役を、ちゃっかり自分が演じ

ることにしてしまう。芝居のリハーサルは難航し、完璧主義者のプライオニーは結局ふてくされて芝居の上演をあきらめてしまう [▶引用 1-2]。

セシーリアとロビーの気まずい関係● プリオニーの姉セシーリア (23 歳) は、ケンブリッジ大学を卒業して実家に戻ってきたばかりで、これからどんな仕事に就こうか迷っている。セシーリアと同年の幼なじみロビー・ターナーもケンブリッジを出たところだが、さらに医学を学んで医者になろうかと考えている。ロビーは階級の点

意地っ張りのセシーリア。

で特殊な境遇にあった。彼はタリス家に仕える掃除婦グレイス・ターナーの息子であり、本来は貧しい (6. ) 階級の人間である。しかしロビーはセシーリアの父タリス氏に気に入られ、タリス氏が教育費をすべて支払うことで大学を卒業できたのだ。まるでロビンソン・クルーソーが野蛮な人食い人種フライデーにヨーロッパ人並みの教育を受けたように、タリス氏は労働者階級のロビーに裕福な上層中流階級並みの教育を授けたのだ。ロビー自身は、自分が置かれた不自然な境遇に屈折した感情を抱いている。幼なじみのセシーリアのことは (7. )

屈折したロビー。

な女性として意識しながらも、本来は「お屋敷のお嬢様」と「使用人の息子」という身分違いの関係であるため気安く話しかけにくくなり、ついよそよそしい態度を取ってしまう。セシーリアはそんなロビーがじれったくて仕方がない。

噴水での気まずい出来事● セシーリアは、兄の帰郷を歓迎するため、家宝の (8. ) の花瓶に花を生けることにする。屋敷の庭にある噴水の泉で水を汲もうと外に出たセシーリアは、途中でロビーに出会って一緒に噴水まで歩く。ロビーは自分が水を汲んであげると言うが、まるで使用人がお嬢様に代わって雑用を引き受けましようと言わんばかりの卑屈な態度に腹を立てたセ

欠けた花瓶。

シーリアは、水ぐらい自分で汲めると花瓶を離さない。結局二人で花瓶の取り合いになり、貴重な花瓶の一部が壊れて泉に落ちてしまう。あわてるロビーを尻目に、セシーリアは直ちに下着一枚の姿になり、泉に飛び込むと、花瓶のかけらを取り戻し、ロビーと目を合わせずに立ち去っていく。後に残されて呆然と立ち尽くすロビー [▶引用 3-5]。

**噴水でのいかがわしい出来事**● そんなセシーリアとロビーを、屋敷の子ども部屋の窓から (9. ) が見つ

## 濡れた下着姿の姉

めていた。何やら大人の世界で淫靡 [いんび] な出来事が起こっているのだが、ブライオニーにはわけが分からない。ロビーに何かを命令された姉がブラウスとスカートを脱ぎ捨てて下着姿になり、泉に飛び込んでずぶ濡れになった姿をロビーに見せている。なぜ姉がそんな辱めを甘んじて受けているのかも分からない。謎が解けないままのブライオニーは、今日にした謎の場面を、いつの日か物語にすることを思いつく。ひとつの衝撃的な事件を、ブライオニー、セシーリア、ロビーそれぞれの視点から別々に物語るのだ。そのためには、三人それぞれの精神の (10. ) をのぞき込む必要がある。

**しゃしゃり出る作者**● ここで作者は、ブライオニーがのちに作家になったきっかけはこの噴水の事件だったと言う。さら

## 他人の内面をリアルに示せるのは、

### 物語

なのだ。もっともらしい議論だが、(11. ) はとまどう。この講釈はいったい何の伏線なのか? [▶引用 6-9]

**金持ちポールにすり寄るローラ**● ブライオニーたちの兄リーオン (25 歳) が自動車に乗ってロンドンから帰ってくる。

リーオンは友人の青年実業家**ポール・マーシャル**を連れてきた。チョコレート会社

を営むポールは、若くしてすでに「チョコレート王」と称される大富豪である。

屋敷の中でブライオニーの従姉のローラに出会ったポール・マーシャルは、15 歳の

少女でありながら大人びた (12. )

のあるローラに興味を抱いて親しげに話しかける。もちろん賢いローラは、大金持ちのポールを熱く見つめ返すのだった [▶引用 10]。

## 金持ち男をねらえ

### 3. 野蛮な事件 (小説の第一部後半)

**痛い誤送信**● 母親と暮らしている小さな家に帰ったロビーは、噴水での出来事を (13. ) して仲直りするた

め、セシーリアに手紙を書く。しかしタイプライターで手紙を打っていたロビーは、泉から上がってきたときのセシーリ

## 夢の中でぼくは…

アの姿が脳裏にちらついてしまうせいで、手紙の最後についつい卑猥な文章を打ってしまう。「夢の中でぼくは君のおまんこ [cunt] にキスしているよ、君の可愛 [かわい] らしい濡 [ぬ] れたおまんこ [cunt] に。ぼくは君とセックスすることばかり

考えている」。ロビーは苦笑して、謝罪の手紙は (14. )

で書き直すことにする。書き上げた手紙を封筒に入れたロビーは、ブライオニーたちの兄リーオンの帰郷を祝う晩餐会に出席するため、一張羅のスーツを来てタリス

邸に向かう。途中でブライオニーを見かけたので、セシーリアに手紙を渡してくれるように頼む。ブライオニーが封筒を

手に走り去ったあとでロビーは気づく。家を出る時あわてて封筒に入れたのは、手書きではなくタイプライターで打った

手紙だったことを。叫ぶロビー [▶引用 11]。

**図書室で成就する恋**● 屋敷に戻ったブライオニーは、さっそく封筒の中の手紙を盗み読む。そこにはこの上なく卑猥な

内容が書かれていた。紳士的で優しいロビーのおぞましい (15. )

を知って衝撃を受けるブライオニー。ブライオニーはセシーリアのそばを駆け抜けざまに、封筒から出された手紙だけを手渡す。あまりにもストレートな愛の

告白を読んで、自分もロビーへの愛に目覚めるセシーリアだったが、手紙が封筒に入っていなかったことに気づき、ブライ

オニーが手紙を読んだことを確信する。晩餐会の前に屋敷の図書室で二人きりになった

セシーリアとロビーは、お互いの愛を確認し合い、濃厚なキスをして、そのまま図書室の

## 野蛮な変質者ロビー

暗闇の中で性的に結ばれる。しかしそのさなか、図

書室のドアを開けたブライオニーが二人の姿を見てしまう。図書室で物音がする

のをいぶかってドアを開けたブライオニーは、闇の中で姉がロビーに襲われている

のを目の当たりにしたのだ。そそくさと歩き去る姉とロビー。今やブライオ

ニーは、ロビーが汚らわしい (16. )

に取りつかれた野蛮な変質者であることを確信する [▶引用 12-14]。

**闇の中のローラ**● ブライオニーの従弟の幼い双子は、自分の家に帰りた一心で、晩餐会の最中に屋敷を抜け出してしま

う。人々は総出で双子を捜索することになる。闇に包まれた広大な庭園の中を (17. )

を手に双子を探していたブライオニーは、従姉のローラが闇の中で男にレイプされている現場に出くわす。あわてて走り去る男。ローラ

自身は、いきなり背後から襲われたので男の顔を見ていないという。ブライオニーも男の顔をはっきり見たわけではない。

しかしブライオニーには分かっていた。このように野蛮な犯罪を犯す男は、性的変質者であるロビー以外にいないことを。

## からみ合う舌

「この目で見ました」● ブライオニーは、駆けつけた警官たちにロビーがレイプ犯であることを告げる。ロビーがローラを犯すところを「この目で見ました」と自信たっぷりに証言するブライオニーは、さらにロビーが性的変質者である (18. ) を示すため、姉の部屋に勝手に入り、ロビーの手紙を盗んで警官たちやタリス家の人々に見せる。タリス家の人々は納得する。名門大学での教育を受けて

私が正義だ。

てやったにもかかわらず、しょせんロビーは野蛮な下層階級の人間なのだ。何も知らないロビーは、迷子の双子を見つけて屋敷に帰ってくるが、そのまま逮捕されてしまう。ロビーの無実を信じるセシーリアは、(19. ) をかけられたロビーの耳元で「待っています。戻ってきて」とささやく。ロビーを護送する警察車両が動き出すと、その前にロビーの母の掃除婦グレイス・ターナーが立ちはだかり、傘の柄で車をひっぱたきながら叫ぶ。「嘘つき！ 嘘つき！ 嘘つき！」。映画ではそれを屋敷の窓から冷静に〈上から目線〉で眺めているブライオニーは、その叫びがブライオニー自身に向けられていることにまだ気がついていない [▶引用 15-19]。

自覚のない嘘つきほど、  
恐ろしいものはない。

#### 4. 逃げまどうロビー (小説の第二部)

下から見上げる戦争● 小説の第二部はロビーの視点で描かれ、ロビーの内面の葛藤がリアルに示される。事件から四年後の1939年にナチス・ドイツとの戦争が始まると、服役中だったロビーは軍隊に送られることになる。ケンブリッジ出のロビーは本来なら (20. ) になれたはずだが、刑務所からの入隊ということで、一兵卒として最も危険な最前線に送られる。1940年5月、フランスに侵攻したドイツ軍は破竹の進撃でたちまち英仏軍をフランス北部に追い詰める。英仏軍では指揮系統が混乱し、自分の部隊とはぐれてしまったロビーは、イギリスに撤退する船に乗るために、二人の戦友とともにフランスの北岸ダンケルクを目指す。敗走の日々はドイツ空軍による急降下爆撃と機銃掃射の連続で、気の休まる暇がない。ロビーはまるで巨人国でさまざまな動物に上から襲いかかれる (21. ) のように、ひたすら空からの攻撃に逃げまどう。道端では動けなくなった負傷兵たちが「水をくれ」とうめいている。立木の枝にはちぎれた人間の脚が引っかかっている。別の道には、真っ二つに切断されたイギリス兵の死体がごろごろ転がっている。ある日の空爆でロビーと一緒に逃げていた民間人の母子は、強力な爆弾が直撃したために、肉体が跡形もなく蒸発してしまう。ロビーもついに機銃掃射で腹部を撃たれて傷を負う。

セシーリアとの思い出● 過酷な日々の慰めになるのは、入隊の直前にセシーリアと再会した時の思い出だった。事件以来、家族と一切の縁を切ったセシーリアは、生まれ育った大邸宅を出て (22. ) の資格を取り、今はロンドンの安アパートで暮らしながら病院に務めていた。セシーリアはロビーに、大学時代の友人のついでで田舎の別荘 (映画では海辺の別荘) を借りられるので、お互い休暇が取れたらその別荘で二人だけで過ごそうと言い、映画ではロビーに海辺の別荘の写真を渡す。ロビーは戦場でもその写真を肌身離さず持ち歩き、いつかその海辺の別荘でセシーリアと過ごせる日を夢見ているのだった [▶引用 20-22]。

海辺の別荘で一緒に過ごそう。

初恋の人ロビー● ロビーはセシーリアからの手紙で、18歳になったブライオニーが法的に証言を (23. ) する意向を示していることを知る。ロビーは5年前のブライオニーがなぜあれほど執拗に自分を陥れようとしたのかを考える。幼いブライオニーにとって、ロビーは憧れの男性だった。10歳のブライオニーは、ロビーと川に遊びに行き、わざと溺れたふりをしてロビーに抱きかかえられ、「あなたに助けて欲しかったの。愛してるから」と言ったことがある。ブライオニーから見れば、ロビーは自分の愛を裏切って姉を選んだのだ。嘘の証言はロビーへの (24. ) でもあった。ロビーは、証言を撤回する気になった勇気は認めるにせよ、自分がブライオニーを許すことは決してないと思う [▶引用 23-26]。

嘘殻に閉じこもる

ブライオニー。

おれはブライオニーを  
決して許さない。

イギリスに帰れる！● ようやくフランス北岸、ダンケルクにほど近いプレー砂丘にたどり着いたロビーたちだったが、イギリスに向かう船はドイツ軍に (25. ) され、浜辺は各地から集まってきた英仏軍の敗残兵であふれ返っていた。いつまで待っても船は来ず、腹部の傷が悪化したロビーは起き上がれなくなり、力尽きそうになるが、その時戦友が、明日の朝にはイギリスに帰る船に乗れることになったと知らせる。ロビーはセシーリアとの再会を夢見て眠りに落ちる [▶引用 27]。

#### 5. ブライオニーの試練 (小説の第三部)

苦行としての看護婦修行● 第二部と同じ1940年のロンドン。18歳のブライオニーは、5年前の嘘の証言のことで罪の意識にさいなまれていた。自分を罰するためあえて大学には行かず、姉と同じ看護婦になる道を選んだ彼女は、今はセ

シーリアとは別の病院で見習い看護婦をしている。彼女の病院はダンケルクから (26. ) してきた傷病兵であふれ、まるで野戦病院のようになる。フランス語が話せるブライオニーは、ある若いフランス人兵士の臨終に立ち会うことを婦長から命じられる。リュックという名のその若者は、戦場で重い傷を負い、グロテスクな〈からだ〉に還元された存在と化していた。しかしブライオニーと語り合ううち、彼の〈あたま〉には故郷の可憐な少女との甘い恋の幻がよみがえり、そのまま彼は死ぬ。彼と話した数分間、ブライオニーは看護婦ではなくリュックを愛する少女になっていた。それは〈嘘〉には違いないが、死を目前にした人にとって、美しい幻が嘘であろうと現実であろうと、どうでもいいことではないのか——作者はおそらくそう言おうとしているのだろう。[▶引用 28-29]

死にゆく人  
に  
甘い恋の幻(=嘘)を。

噴水の事件を処女作に● ブライオニーは看護婦の仕事の合間に、(27. ) の事件を題材にした小説を執筆し、文芸雑誌に投稿する。掲載はされなかったが、編集者から好意的なコメントが届く。編集者は小説を改善するため

## 編集者の助言が現実を書き換える。

に貴重な助言をしてきていた。恋人たちが取り合って壊す花瓶が明朝磁器では高級すぎるので、もう少し身近な磁器にしたほうがいい。女は水の中にもぐったほうがいい。

恋人の手紙は少女に運ばせるほうがいい。少女が恋人たちの関係を親に暴露するほうがいい。読者はとまどう。第一部のストーリーや設定は、この編集者が言うとおりでではないか？ まるで編集者の助言が現実を書き換えてしまったようだ。

ローラの結婚式● 従姉のローラがチョコレート王のポール・マーシャルと結婚することを知ったブライオニーは、招かれざる客として結婚式が行われている教会に向かう。ブライオニーを見てたじろぐローラ。ブライオニーは今では確信している。闇の中でローラを襲った真犯人はポール・マーシャルだ。ずる賢いローラは、(28. ) を避けるためにブライオニーを利用してロビーに罪を着せようとして、自分をレイプした大富豪と結婚したのだ [▶引用 30-31]。

「本当にごめんなさい」● ブライオニーは教会を出て、そのままセシーリアが住む安アパートへ向かう。その部屋で姉は、フランスから生還して健康を取り戻したロビーと一緒に暮らしていた。「本当にごめんなさい」と謝罪するブライオニー。当然二人の態度は冷たかったが、ロビーは冷静に、証言撤回のためにどういう手続きを取ればいいのかをブライオニーに指示する。恋人たちの何気ない会話から、彼らが望みをかなえて田舎の別荘(映画では海辺の別荘)で休暇を過ごすことができたのが分かる。アパートを出て地下鉄に乗ったブライオニーは、いつか自分の罪を (29. ) ための小説を書こうと決心する [▶引用 32-37]。

奇妙なひとひねり● こうして小説は終わるが、最後に作者の名と執筆年が書かれている。「ブライオニー・タリス、ロンドン、一九九九年」。読者は驚く。この本はブライオニーたちの人生を客観的な作者が語っていたものだと思っていたのに、1 ページ目からここまでの文章はすべて、ブライオニー自身が書いた小説だったのだ！ ここまでの物語のどこまでが客観的な事実で、どこからがブライオニーによる (30. ) つまり〈嘘〉なのかが、まったく分からなくなってしまう。ロビーの視点から描かれた第二部も、ブライオニーがロビーという他人の内面に入り込んで書いた〈嘘〉だったのだ。ロビーがブライオニーを「決して許さない」と思うのは、ブライオニー自身の自責の念がなせるわざなのだ。

## 6. 誰に何を つぐなうのか

最後の作品● 小説が終わった後に付された「ロンドン、一九九九年」という文章では、77 歳になったブライオニーが、執筆の動機を語っている。脳血管性痴呆 [ちほう] と診断された彼女は、近いうちに痴呆状態となり、精神的な死を迎えることになる。そうなる前に書き上げたのが、彼女の最後の作品となるこの小説だったのだ。ブライオニーは小説の中で、いくつか嘘をついていた。現実のブライオニーは、セシーリアのアパートに謝罪に行くことはなかった。それどころか、現実のロビーは小説第二部の最後の場面で、セシーリアはその数カ月後にロンドンを襲ったドイツ軍の空襲で、それぞれ (31. ) いたのだ。戦争は二人の命とともに、ブライオニーが罪をつぐなう機会も奪い去っていた。

ラストシーンの書き換え● 死者を生き返らせない限り、死者につぐなうことなどできはしない。(世間で「死者へのつぐない」とされているのは、実は遺族へのつぐないでしかない。) ブライオニーにとって、真の「つぐない」の機会はずっと永遠に失われているのだ。彼女が小説という〈嘘〉の中で、愛し合うロビーとセシーリアを再会させるとともに、彼らにきちんと謝罪し、法的に証言を撤回する決心

死んでいった人たちに  
甘い恋の幻(=嘘)を。

## 死にゆく私に

つぐないの幻(=嘘)を。

をするのは、現実では姉たちへの「つぐない」を許されなかったがゆえに苦しみ抜いた、(32. ) の人生に対する「つぐない」なのかもしれない。結局ブライオニーは最後まで「嘘の殻に閉じこもる」ことになるのだが、死を目前にした人にとって、美しい幻が嘘であろうと現実であろうと、どうでもいいことではないのか。映画のラストシーンで、ロビーとセシーリアという二人

のキャラクターが、まるでおとぎ話の王子様とお姫様のように仲睦まじく過ごす場面が描かれるのは、それが遺族としても (33. ) としても、一生かけて二人を愛し続けたブライオニーの夢だったからなのだ [▶引用 38-41]。